

# 学校外スポーツ活動が体育授業意識に及ぼす影響

長澤 美緒 (横浜国立大学)

## 1. 目的

本研究では、運動能力や運動習慣など様々な格差が存在する学校において、学校外スポーツ活動の種目別の経験やスポーツへの考え方が、学校体育授業の各領域においてどのような影響があるのかを明らかにし、「格差の下位層だけでなく上位層にも目を向けた、全ての子どもが楽しめる体育授業の在り方」について検討することを目的とした。

## 2. 研究方法

- 1) 対象者：A大学の大学生 297 名とA大学附属B小学校・C小学校の5・6年生 208 名
- 2) 調査方法：神奈川県立体育センター (2014) 他を参考に質問紙を作成し、調査を行った。
- 3) 分析方法：単純集計及び、統計ソフト IBM SPSS25.0 を用いた平均値の比較・相関関係分析・クロス集計、テキストマイニングソフトの KH Coder-200e-f (樋口, 2004) の共起ネットワーク分析を用いた自由記述分析を行った。

## 3. 結果と考察

体育授業における「好感度」「有能感」「ふきこぼれ」「落ちこぼれ」の質問項目において、5件法でその体育授業意識と同じ種目の学校外スポーツ活動経験者と非経験者の平均値を比較した。その結果、水泳の習い事経験者は、非経験者よりも「好感度」「有能感」「ふきこぼれ」の3項目が有意に高く、「落ちこぼれ」は有意に低い結果となった(図1)。

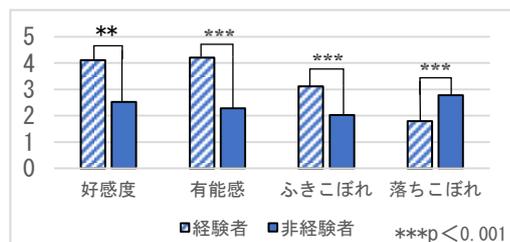


図1 水泳系における習い事経験と体育授業意識

また、器械運動・陸上運動・ボール運動・表現運動についても同様の結果が得られたことから、習い事経験者は、その習っている種目の授業に対する好感度や有能感が高く、落ちこぼれになりにくいとともに、ふきこぼれになりやすいと考えられる。

一方、得意な種目の授業でも「仲間と協力して活動する」「ルール工夫により本気になって運動できる」「他の人の運動を『見る』『応援する』」などの場面があると退屈せずに楽しめるということが考察された。また、苦手な種目の授業でも「仲間との励まし合いや教え合いがある」「称賛の声をかけてもらえる」「仲間からの受容感を得る」などの場面があると楽しめるということが考察された。

以上の考察、及び文部科学省 (2017)・梅澤 (2016) 他の先行研究を踏まえると、「格差の下位層だけでなく上位層にも目を向けた、全ての子どもが楽しめる体育授業」には、①誰もが楽しめる場の工夫やルールの設定、②協働達成不可避なプロジェクトやテーマ設定、③運動を「する」こと以外運動の楽しみ方や関わり方の3点が必要となってくると考えられる。

## 4. 結論

学校外スポーツ活動は、習っている種目の体育授業意識である「好感度」「有能感」に対してプラスの影響を及ぼし、落ちこぼれになりにくい一方で、ふきこぼれになりやすいことも考察された。また、「格差の下位層だけでなく上位層にも目を向けた、全ての子どもが楽しめる体育授業」に必要とされる3つの視点が考察された。

## 5. 主な参考文献

梅澤秋久 (2016) 体育における「学び合い」の理論と実践. 大修館書店.